



1. 水ききんに思う
2. 川は排水路ではない
3. 深刻な事態を予測させる巨大都市問題

1. この夏の日照りは大変なものであった。水が無い、電気が無い、スモッグが出る、この三大パンチに見舞われて、ただ無言で新聞のニュースを追う。子供までが今日の琵琶湖の水位は何センチかと聞く。

水対策は水需要の伸びを基本として供給計画がなされるが、この伸び率は自然現象ではない。政府は高度の効率利用の必要性を説き、その成果は用水の回収率の向上に見ることはできるが、もともと開発量の有限な資源を承知で需要伸びを安易に設定するわけにいかない。工業用水はより以上に、上水も原単位を減少せしめることを深刻な問題とし、政府は一刻も早くその非常事態を宣言し、国民に正しい節水のあり方を教えるべきである。現在のように統計資料的な需要を供給が追いつけるようでは今夏のような干ばつでパンクするのは当然で、その場におよんでの節水は利用者の供給者に対する不信感を高めるばかりである。いっそのこと、事態の終えんを予想して、水を「使うな、汚すな、求めるな」をスローガンとして出発し、政府も国民も水問題にからむ人口・産業の分散や広域利用を考え直してみたらどうか。 [J]

2. 日曜の朝など、郊外にあるわが家の近くを散歩すると、空はますます青く、空気は澄明度を増して、秋の深まりが肌に感じられる候となった。先ごろ散歩の足を、去年までは田畑を縫って流れていた小川の近くまで伸ばしてみた。

すると、近ごろの郊外地のどこでもそうであるが、わずかな期間のうちにすっかり様子が変わっており、田圃は埋め立られ、畑は削られ、ブルドーザーが唸り、雑壇の宅地が造成されつつある。さて、蛙や鮎かわいなどが遊んでいた小川はと見ると、直に近いコンクリートのり面の排水路と化し、河底の土砂の間を濁水がチョロチョロと続いている。以前を知る者には大きな変化である。増大する洪水流出に備えて、疎通能力を数倍に上げたものであろう。その代償に蛙や鮎の棲むあのせせらぎは失われ、子供たちの遊場や大人たちの散策の場所もなくなった。たしかに安全度は向上し、20~30年に一度の洪水も氾濫させることはないであろう。しかし、これはわれわれが古来親んできた川とは異なり、排水路と呼ぶにふさわしい。われわれ土木技術者、とくに河川技術者は仕事のうえとはいえ、多くの川を単なる排水路に変えてしまったのである。主要目的を追求するあまり、人間的な配慮が欠けてしまったように思う。

近年、住民の反対などで公共事業の達成率が悪化している原因の一つは、こんなところにあるのかも知れない。 [S]

3. 昭和44年に策定された新全国総合開発計画の総点検作業に取り組んでいた経済企画庁は、先ごろその一部の間報報告を発表した。数多くの問題点の中でもとくに大きな課題であった東京等の巨大都市問題に関する中間報告は、官庁の報告であるから、必ずしも絶望的な感を与える切迫感にあふれた表現ではないが、地域政策の無策がこのまま続くならば、東京のごとき人類の最極端の実験例ともいえる巨大都市の破局は目前であることを強調した内容の与える衝撃が、決して小さいものではなかったことは、日刊各紙等の反応にも表われていたとおりである。

経済企画庁が推計に用いたデータそのものは、必ずしも新味があるものではないが、その内容はきわめて重大である。政策の不在をなじる声は多いが、大都市がここまで追い詰められてきたのも、説得力ある処方箋が学界等から示し得なかったこともその一因である。経済学、行政学等とあいたずさえて、土木技術者も破局を救う総力戦に、よりいっそう参加しなければなるまい。われわれも沈みゆく船の上でヤミクモに工事をしている船大工にはなりたくないものである。 [C]

Vol. 58-7月号から9月号までの本欄の執筆は、下記編集委員が担当しました。

J 伊藤 学, S 古賀英裕, C 中村裕忠.